



TITLE:

租税ノ新傾向

AUTHOR(S):

神戸, 正雄

---

CITATION:

神戸, 正雄. 租税ノ新傾向. 經濟論叢 1915, 1(1): 126-128

ISSUE DATE:

1915

URL:

<https://doi.org/10.14989/126863>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

# 經濟論叢

第一號

第一卷

## 論說

●貧富問題(二)

●でうゐつゝひゆゝむノ經濟學說(二)

●地代ノ性質ニ就テ

●地方財政ノ調整

## 雜錄

●減債基金ト鐵道資金

●獨逸ノ自治制ニ就テ

●戰爭ト社會問題

●津村博士ノ國民經濟學原論ニ就テ

## 雜報

●租稅ノ新傾向

●佛國ノ外國放資

●佛國植民地ノ現勢

●著名ノ婦人ニ關スル統計的研究

●麥ノ收穫ト米價

●最近人口靜態統計

●日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

●和田垣教授在職二十五年祝賀  
Robert Meyer 逝ク  
●ひねゝるゝろわゝりゆゝ氏ノ陳亡

法學博士 田島 錦治

法學博士 福田 德三

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

法學博士 小川 郷太郎

教授 財部 靜治

講師 米田 庄太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 神戶 正雄

法學博士 小川 郷太郎

助教授 山本 美越乃

法學博士 河上 肇

講師 高田 保馬

法學士 大山 壽

法學士 本庄 榮治郎

法學博士 神戶 正雄

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 織田 萬

雜報

租稅ノ新傾向

法學博士 神戸 正雄

最近入手シタル政治及社會學院報告中ニ稅制整理論集ガアツテ、其緒論トシテせりぐまん教授ノ米國ニ於ル租稅ノ新傾向ト題スル一文ヲ掲グル、其説明ニハ二三異論ヲ挾ミタイ點モアルガ、其ガ單ニ米國ノ事ノミニ止マラズ、歐諸國ニモ及ンデ、日本ノ實務ニモ確カニ參考トナル故ニ、茲ニ之ヲ摘錄紹介スル。氏ノ說ニヨルト斯ノ如キ新傾向五アリトイフ。左ノ如クデアル。

(一) 第一ハ人稅(人ノ全所得又ハ財産ヲ課スルモノ)ト物稅トノ關係ニツキテ、稅制ハ物稅ニ初マリテ人稅ニ發展スルヲ例トスルモノデアル。例之。にゆーいんぐらんどニテ初メハ羊、牛、豚家畜賣買等ノ稅ガ行ハレシモノガ、段段進ンデカラ始メテ一般財産稅ガ發達シタ。(尤モ日本ノ

發達ハ之ト異ル。人稅ガ物稅ヨリモ早ク發達シテ居ル。他ニモ例ガアル處ガ此人稅ガ一時實行上失敗ニ歸シ、爲メニ十九世紀中ノ歐羅巴、及多少遲レテ米國ノ一部ニ(a)物稅、人稅ニ代ル、傾向ヲ生ジタ。例之佛蘭西ニテ革命後ニ地租、家屋稅、營業稅、門窓稅、動產稅等カ舊時ノ人稅ニ代リタルカ如キ、米國ニ於ラハ紐育州ノ財産稅、抵當稅、保證債稅、銀行稅、べんしるぐえにあ州及其他ノ州ノ營業稅、諸多ノ州ノ消費稅及相續稅ノ一部ノ如キ之ヲ證スル。然ルニ(b)近頃ハ又此傾向ト相並ンデ、人稅制度ヲ採ル傾向ガアル。即チ米國ノ所得稅ノ發達、佛國ニ於ケル所得稅ノ發達カ之ヲ證スル。此ニ於テカ今口米國デハ二重ノ傾向ガアル。一ハ人稅ヨリ物稅ニ移ル傾向デ、此ガ米國ノ州及地方稅ニ現ハレ、他ハ物稅ヨリ人稅ニ移ル傾向デ、此ガ合衆國ニ現ハルル。

(二) 第二ノ傾向ハ國稅ト地方稅トノ關係ニ關スルモノデ、(a)米國デハ地方稅ガ國稅ニ移ル傾向ガアル。凡テノ稅ハ元ト地方稅デ、之ヲ漸次國稅トナツタモノデアル。(此ガ日本デハ反對)其第

一步ハ國稅ノ地方稅上ノ附加稅デ、恰モ此ガ米國ノ諸州ニ行ハルル。之ガ進ムト地方行政ノ手ヲ離レテ國家行政ノ手ニ移ルコトナル。或州デハ之ガ行ハレツツアル。例之紐育州ノ消費稅、相續稅、<sup>(a)</sup>すこんじんノ所得稅、諸州ノ會社稅ノ如クデアル。<sup>(b)</sup>之ト並ンデ又之ニ次イデ國稅ヨリ、地方稅ニ移ル傾向ガアル。獨逸ノ地租營業稅等ガ十九世紀末葉ニ國稅カラ地方稅ニ交付セラレ、國稅トシテハ新ナル人稅ガ有タルコトナリ、英國ニモ多少此種ノ事ガ行ハレ、而シテ今日米國デハ未ダ着手ハサレテ居ラヌガ、問題トナツテ居ル所ノ國及地方收入分離トイフコトノ意義ハ此邊ニアルヤウデアル。其根據ハ或種ノ稅ハ國ニ、他種ノ稅ハ地方ニ適當ストイフコトニ在ル。

(三)第三ノ傾向ハ<sup>(a)</sup>一般ニ課稅ノ標準トシテ財產、其モハヨリ財產ヨリノ所得ニ移ル傾向ガアル。何故ニ一般財產稅ガ米國到ル處ニ失敗シタカハ、其ガ人ヲ課スルニ不當トイフコト、最早今日ハ地方的ナラザル物體ヲ地方的ニ課稅スル

トイフコト、バカリデナク、今日ノ狀態デハ財產其モノガ財產所得ヨリモ給付能力ヲ示スモノトシテ一層不當ナルコトニ因ル。此ト同事ハ米國ノ會社稅ニモ現ハレ、此ニ於テ財產ヨリモ收入ニ重キヲ置ク。米國ノ森林稅及鑛業稅ニテモ亦タ收益及產額稅ガ財產稅ニ代リツツアル。米國ノ實業家ノ間ノ感知モ今日ハ其事業ニ放下シタル財產ヨリモ所得又ハ收益ノ方ガ課稅標準トシテ適當トイフニ在ル。二十世紀ガ財產稅ヨリハムシロ所得稅ノ世紀トナレリトイハルル主要ナル理由モ此ニ在ル。<sup>(b)</sup>他方ニハ反對ノ傾向モアル。特ニ地方稅トシテノ地租ノ場合ニ、課稅標準トシテ財產價值ノ方ガ土地ノ地代又ハ收益ヨリモ一層適當ト認メラルルコトニナツタ。其ハ畢竟市街地ノ投機トイフコトノ爲メデ、土地ノ投機ノ財產價值ガ實際ノ地代又ハ收益ノ還元價值ヨリモ一層大デ、此際前者ヲ標準トシテ課稅スルヲ至當トスル。英國及歐大陸ニ於ケル地方稅ニ關スル傾向ハ即チ是デ、收益價值稅ヨリ財產價值稅ニ移ルコトニ在ル。

(四) 第四ノ傾向ハ (a) 租税ニ於ケル利益説ヨリ能力説ニ移ル傾向デアル。此ハ稍稍夫ノ物税ヨリ人税ニ移ル傾向ト並行スル。物税ノ理由ハ特定ノ課税物件ガ政府活動ニヨリ或利益ヲ受ルト推定サルルコトニ在ル。今日租税ガ人ノ上ニ課セラルル其理由ハ人ガ其家族ヲ扶養スル義務アルガ如クニ國家ヲ維持スル義務アリト認メラルルコトニ在ル。(b) 併シ此ニモ更ニ反對ノ傾向アリトモイハルル。少クトモ一部ニ於テ。今日ニ於ケル特權ニツイテ之ヲ課税ノ物件トスルコトガアルガ、之ガ物又ハ人ニ關スル利益ト解セラルルナラバ、右ニ對スル反對傾向トモイハルルガ、然シ此特權ガ人ノ給付能力ヲ増スノ故ニ課税サルルトスレバ、敢テ夫ノ反對傾向トイフニハ及バナイ。

(五) 第五ニハ租税ガ箇人的考察ヲ離レテ社會的考察ニ移ルトイフ傾向デアル。此ハ米國ノ所得税ノ累進課税ニ現ハレ、歐諸國ニ既ニ行ハレ米國ニモ行ハレントシツツアル所ノ努力所得ト不勞所得トノ間ノ差等課税ニモ現ハレ、其他社

會の理由ニヨル減免特典ニモ現ハルル。特ニ地方税ニ於テ土地ニ一層高キ税ヲ課スル近頃ノ運動モ之ニヨリ説明セラルル。其レカラ或種ノ間接税デ利益説ヨリモ能力説ヨリモ説明ノ困難ナルモノガ此社會的考察ヨリスレハ説明ノ出來ルコトニナル。即チ社會經濟ニ對スル結果ノ點ヨリ説明スルノデアル。